



向こう岸が見えるまで

野村真理

都合4年間、日本学術振興会特別研究員の審査をした。私の担当はおもに西洋史だが、最近の若手研究者はよく鍛えられている。自身の研究課題に関連する研究史を批判的に精査し、その延長線上で自身の研究がいかにか画期的であるかを力説する。彼らを駆り立てているのはアカデミックな問題関心だ。「己の実存にとって、己の研究は何を意味するのか。」いま小熊英二氏の新著『1968』（新曜社2009年）が話題になっているが、こんな青臭い問いを口にする、「あなた、全共闘世代ですか」とかわされるのが落ちだろう。

私は全共闘世代ではない。私が大学進学を考える頃、学生運動はすでに凄惨な内ゲバへと墮落していた。どうやら「遅れてきた青年」になったらしい私には、何かよくわからないがラディカルなもの、社会と自己の根本的な変革を求める熱い運動を体験し損ねたという気分と、他方では、過剰に政治的な季節が過ぎ去った後の白けた気分、政治的なものに対する嫌悪感の両方があった。

地方のさえない県立女子高で、3年次の担任に、政治とか社会に関心があるが、数学も魅力的で、日本の古典文学も好きだと言ったところ、全部やればいいじゃないかという。だけど順番をつけるなら、若いうちが数学で、次が社会科

学、最後が古典だ、というのだ。もともと社会科学系の学部が第一志望だったのに、これであっさり理工学部の数学科に入学したのは、白けの気分の方が強かったからかもしれない。しかし、数学科の卒業が近づくと、どうしても「次」がやりたくなり、ご丁寧にももう一度大学入試を受け、一橋大学の社会学部に入学した。これを機に、経済的には自活した。

研究者としての私にとって、一橋で出会った本と恩師は決定的だった。良知力先生の『マルクスと批判者群像』（平凡社選書1971年）やE・H・カー（酒井唯夫訳）の『浪漫的亡命者』（筑摩叢書1970年）は、革命的状況において思想が立ち上がる緊張感、思想と現状の弁証法的からみあい、党派と党派、党派と個人の葛藤、革命家のドラマ的人生を描いてあますところなく、社会思想史とはこんなに面白い学問かと心が躍った。私は、遅れてきた者が体験し損ねたものを本のなかで体験して興奮し、迷わず良知先生のゼミに入った。

同じ一橋の大学院に進学した後、良知先生の勧めで取り組んだのはモーゼス・ヘス研究である。ヘスは『マルクスと批判者群像』の登場人物の1人で、先生はヘスの生き様が好きだった。どうも、誰か自分の院生にヘス研究をやらせたかったらしい。それはさておき、学問上の理由

は別である。ヘスはドイツ初期社会主義者の1人だが、ドイツ1848年革命挫折後、晩年にはシオニズム運動の思想的先駆者になるという遍歴をたどったユダヤ人で、修士論文でヘス研究をやれば、そのあとドイツ社会思想史研究を続けるか、あるいはユダヤ人問題研究に移るか、二つの道のうちのどちらかで生き残れるだろうということだった。この配慮は適格で、私の能力だと、すでに研究蓄積の厚い前者では勝負できないと覚るのに時間はかからなかった。そこで博士課程では、当時の日本ではほとんど研究がなかったドイツ・ユダヤ人の社会史的思想史研究を志したのだが、正直に告白して、それから先の道のりは長かった。私は、以後、数年間、いま学振の特別研究員が書き上げるような研究計画をまったく書くことができなかつたのである。

良知先生の名著に『向こう岸からの世界史』（未来社1978年）がある。「向こう岸」の東欧ユダヤ人が西欧世界に与えた衝撃を理解しなければ、ナチがいうユダヤ人問題の最終解決の思想史的、歴史的意味は理解できないのではないか。ようやく問題意識が固まってきたのは、勉強をはじめて10年目にして、最初の著書『西欧とユダヤのはざま』（南窓社1992年）を出した頃だ。さらに、この問題意識をウィーンという街を舞

台に検証した2冊目の著書『ウィーンのユダヤ人』（御茶の水書房1999年）を出すまで、また数年が必要だった。鉄のカーテンが開き、東欧ユダヤ人の世界を自分の足で歩いたのはその間のことである。

私はいつ研究者になったのか。研究職に就いたのも早くはないが、自分の研究によって、研究しなければ見えなかつたであろう世界が見えるようになり、自分の研究の独自性を多少は自覚できるようになったのは、2冊目の著書を出してからである。では、見えるようになった世界は、私にとって何を意味するのか。社会思想史を専門とする者の病気かもしれないが、こういう青臭い問いは、答えが出ないまま、いつまでたっても私の頭から離れない。こんな調子で、もし、いま私が若手だったら、確実に私は業績競争から落ちこぼれている。

「養老院より大学院」とは、相撲研究で東北大学大学院に社会人入学された内館牧子氏の言である。私の「次の次」は日本の古典文学だが、これで研究者になることは、まあ、ない。

野村眞理（のむら まり）
日本学術会議第一部会員、金沢大学経済学経営学系教授
専門：社会思想史、西洋史